

説教 「喜びも悲しみもわかちあって」

エゼキエル 37:1-14

ローマ 12:1-16

2024. 3. 3

仙川教会代務者 大串 眞

今年度も残すところわずかになりました。そして、いよいよ本日の礼拝をもってわたしは、仙川教会の礼拝を終えることとなります。皆さんもすでに御存じの通り、次期教師である高橋先生ご夫妻も、先週、牧師館に引っ越していらっしゃいました。本日礼拝後の役員会を終えますと、もう一回仙川教会に参りまして、高橋先生と引き継ぎを予定しております。終わりの挨拶は、礼拝後に致します。

さてこの代務の期間、ご一緒に読んで参りました、ローマの信徒への手紙の最後の回として、12章を取り上げました。御言葉に耳を傾けましょう。代務の期間、ローマの信徒への手紙を読みましたが、それは本務教会のユーカーが丘教会でも一緒に読んで礼拝をしてきました。間が空いたり、かいつまんで読んだこともあり、またわたしの力不足もあって、なんとなくぼんやりということだったかもしれませんが、私自身教えられたり、確認したり、また新しく示されたことは、わたしたちに与えられている福音こそ、わたしたちの力の源だということでした。それは仙川教会のこれからの歩みということでしょう。また、ユーカーが丘教会にとっても、もうひとつの代務をしている八街西伝道所にとってもということです。特に、仙川教会は、主任担任教師が病気で倒れ、召されるという悲しみからスタートしています。新しい教師を迎えてのこれからの仙川教会の歩みについては、いろいろな課題が当然あることでしょう。しかし、わたしたちが礼拝に集中し、祈りを一つにしていく時に、聖霊の力が加わって歩みが導かれていく。それをこの無牧の期間中、皆さんは、礼拝によって導かれてきたということでしょう。

さて、今日読みました、ローマの信徒への手紙 12章にも基本的にそういうことが書かれています。特に、12章の1節から語られていることは、礼拝ということですね。クリスチャンとしての基本中の基本。それは礼拝を第一のこととして整えることです。それはこの日曜日の限られた時間だけということではなくて、わたしたちの全生活、また生涯のすべてにわたって、この礼拝を第一とする生活を大事にすることで、わたしたちが教会につらなる。それが、教会にとっても一番大切なことですが、また同時に、わたしたち一人一人にとってということなのです。みなさん、そして、特に本日洗礼を受けられたお二人にお話します。礼拝第一にするクリスチャン生活を確保することは、神様が喜んでくださることです。そして、実は、わたしたちの人生も、このところで、神様が祝福してくださることをお約束してくださっています。わたしたちが豊かな人生を歩むためにも、しっかりと教会につながってください。

今日のところは大づかみにお話していきます。3-8節には、教会に連なることの中の一つとして奉仕ということが出て参ります。わたしたち一人一人には神様からの愛が同じように注がれているのですが、賜物という点では違いがあります。才能と言っても良いです。ここは、教会はキリストの体であって、わたしたち一人一人は、手であったり、足であったり部分だといえます。昔の訳では「肢体」です。神様の愛は一つですが、働きは多様性があります。ですから、わたしたちはお互いに比較して評価して、高ぶってみたり、自己卑下してみたりするのですが、神様から愛されている自分自身を、高すぎもなく、低すぎもない。あるがままを受け取ることが大切です。そして互いにうけいれあう。そういう仕方です。特に教会で自分の持てる分で奉仕するということが勧められています。

次に9-14節は、愛に生きるということです。ここも詳しくみることはできませんが、大事だと思われるところをピックアップしましょう。

冒頭の9節「愛には偽りがあってはなりません。」とあります。この偽りは偽善という意味があります。その意味は、仮面をかぶるという意味から来ているそうです。仮面をかぶって舞台上で演じる。そういうところと、仮面を脱いでふだんの生活になったところでは違う態度や言葉になってしまうという。それではいけないのですね。愛はうそっぽくなります。でも、愛とは表と裏がないのです。それは真実ということです。腹に何か欲望をかかえて、愛らしい言葉や顔を装って近づくと、そういう詐欺のようなことにならないようにという。

「悪を憎み、善から離れず、兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって相手を優れた者と思いなさい。」ここには、愛の教えの大切な要素がたくさん入っています。愛に生きるということは、正しいこと、正義や公正も大事にすることですよ。相手に対する敬意ということが大切ですよ。

11-12節は飛ばして後に回しますが、13節からのところ、「聖なる者たちの貧しさを自分のものとして彼らを助け、旅人をもてなすよう努めなさい。」これは当時の初代教会においては、具体的に愛の対象が見えていたのです。口さきだけでなく、具体的にということでしょう。またわが事としてすること。困っている現実がある時に、スルーせず、素通りせず、わが事として痛み、受け取り、自分でできる範囲で担っていくことです。身近な所だけでなく、遠い世界でも助けを必要としている人びともいます。具体的には小さなことかもしれないですが、まったくできないわけではありません。少なくとも祈ることはできます。また、募金など自分のできることで愛をあらわしていくのです。素通りはよくないのです。

14節「あなたがたを迫害する者のために祝福を祈りなさい。祝福を祈るのであって、呪ってはなりません。」愛するということは、自分の愛しやすい人を愛するだけではないのです。愛しにくい人。自分に対して、敵意とか憎しみとかをいただいたり、具体的に迫害、脅し、圧力などいろいろとしてくる場合も。このことは、世間一般では、限界があるのです。やられたらやりかえす。力に対しては力。そうしないと負けてしまうと思うのです。でもクリスチャンになったら、ここは違ってくるのです。イエス様は、山上の説教で、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。」言いました。(マタイによる福音書5:44)また「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる。」と(マタイによる福音書26:52)

愛に生きるというときに、こういう問題も乗り越えていくことが神様の御心です。

15節「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。」

これは愛に生きることを最も簡潔に、言いあらわすことばと言えましょう。共に生きていく。これは皆さんお気づきでしょう。なかなか大変なことであることを。子育てという課題のことを考えても、夫婦という課題を考えても、また介護という課題のことを考えたとしても、実際のところ、わたしたちを悩ます課題ばかりあります。これを広げて、国と国の戦争と平和の課題だとしても、また、わたしたちにとっては、この教会に連なって共に生きていくということについても。

しかし、皆さん、わたしたちの人生の課題、また教会にとっての課題が迫って来る、そういう試練が訪れる。そういう試練がある中でこそ、実は、わたしたちの愛の絆が深まっていくことになっているのであります。平穏で何も無い中でなく、困難な現実こそが用意されている神

の導きです。

その導きが先ほど飛ばしました 11 節にあります。「怠らず励み、霊に燃えて主に仕えなさい。希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい。」

ここは、教会に連なり、愛に生き、共に生きる現実の中で、また特に、厳しい現実が目の前に覆い、試練が身に及んでくる中で、怠らず礼拝を守り続けなさいということです。そして、要するに、クリスチャンの原点として礼拝を大切にすることです。この原点に戻るからこそが試練の突破口となります。ここで本当に、道が拓かれるのです。必要も満たされていくのです。

さて、ここで、今日の説教題について触れましょう。この「喜びも悲しみもわかちあって」という題は、かつての仙川教会で行われた礼拝説教の題でした。説教者は大串元亮牧師でした。昨年、の召天者記念礼拝の際に、鈴木和子姉から直接手渡されていたいただいた説教集です。仙川教会が創立 10 周年を超えた 12～13 年頃です。私も高校生の頃で、この礼拝に参加していたと思います。実は記憶にはないのですが、その頃ローマ書の講解説教をしていたのですが、その録音テープを鈴木忠男兄が原稿に起こされてきれいな清書で書かれたものを印刷して綴った手作りの説教集です。この 12 章の説教は、教会修養会の日の午前中で語られたものです。12 章の説教題が、説教集の題となりました。教会形成を願う牧師の願いとも受け取りました。わたしはこの説教集を読みながら、仙川教会の歴史を思い返していました。

仙川教会の宣教は、その後、15 年～20 年のいわば青年期を迎えます。その青年期は、教会形成でうんと苦しんだ次期でもあります。わたしは、端からみていました。父、大串元亮牧師の欠けや弱さもあったことでしょう。牧師も牧師夫人も、そして、教会員の皆さんも苦しんでいました。わたしは、ちょっと端で、距離を置きながらも、教会員でしたから、それなりに、悩み、それなりの批判的な意見もち、しかしまた、それなりの仙川教会愛をもって共に過ごしていました。そんな中で、あまりに厳しいので、明らかにもがき苦しんでいたのも、身内として意見を父に言ったことがあります。そこまで頑張らなくてもいいんじゃないか。牧師をやめて大学の教授の道だってあるのでは。そんなことを自分なりに率直に言ったこともあったかと思えます。しかし、それでも、父は講壇に上っていくのです。その講壇に上り続ける父の後ろ姿をわたしや兄はずっと見ていました。それは迫力でもありました。何か、厳かな人の力を超えたものを感じる時でもありました。そしてわたしは、このことがきっかけで自分の献身の道が導かれていったのだと思います。兄もそうだったかもしれません。

ある時、いろいろな思いで、仙川教会の礼拝に出ていたのです。批判的な思いも引きずりながらの礼拝出席でしたから態度はよくなかったと思います。しかし、不思議な事が起こったのです。その講壇から聞こえてくることは、人間としての父の言葉ではなく、神の言葉としてわたしの心に深く響いてきたのでした。そして、いつのまにか、神様を心からほめたたえるようになっていました。どうしてそんなことが起こったのか。この教会には、神様が生きて働いていることがその時に分かったのです。神様が牧師を通して、生きた御言葉を届けてくださっている。しかも、弱さを持ち、破れを抱えている、そんな牧師を通して、神様が語ってくださっている。またそのことを教会の方たちも知っているから、味わっているから、教会の皆さんも、いろいろな課題を抱えながらも、この仙川教会に通い続けている。そのことが分かったのです。ああ、そうか、この教会は神様が生きて働いておられるところなんだ。だから大丈夫だ、と思えたのです。それからです。いろんなことがあっても動じなくなりました。いろいろなことが起こっても動揺しなくなりました。神様がこの教会を支配してくださっている。神様の教会だ。

人間的に牧師を見ないということもわかりました。御言葉に集中したらいい。主イエス・キリストだけを見つめて歩むことに導かれる。それが、この仙川教会から学んだ大切なことの一つです。

この代務の期間にも、わたしは大切なことを学びました。この代務の期間、わたしは主任担任教師の代務ではありましたが、実際には、仙川教会は牧師のいない無牧師、無牧の期間だったのです。でも、不思議なことに、この期間に、今日の洗礼者を入れて5人の方が受洗に導かれました。手厚く、求道中の方がたに寄り添えたわけではありません。最近まで、コロナ禍の影響を受けていましたから、まあ、教会の信徒さんたちも、放牧状態。救いを求めて礼拝に集っておられた教会に来たての方々に、なんの配慮もできなかったのだと思います。この期間、とにかく礼拝を守るだけで必死でした。でも、だからこそ、人に結びついたのではなくて、神様に一人一人が結びついたのです。これは、実際に洗礼を受けた方から伺ったことです。無牧で、いろんな意味で、足りないことだらけなのにかえって、御言葉を通して神様と向き合う祝福が増したのでしょうか。

皆さん、このことも、神様は生きて働かれるとことの証です。仙川教会には、この生きて働かれる神が支配しておられるのです。だから大丈夫なのです。これからも、いろんな意味で試練はあるでしょう。教会としても、また一人一人としても。でもだからこそ、この教会に連なって御言葉に聴いていたら大丈夫なのです。そこで聖霊が働くことになっているからです。

大切なことは原点から離れないことです。礼拝にいつも帰ってきて、御言葉によって立たせていただく。この姿勢を生涯貫いていきましょう。あたらしく就任される教師を中心に、御言葉に聴き続けてください。主あって愛において成長してください。「喜びも悲しみもわからあって」いく教会として、共に生きていく生涯へ。さあ、それぞれの新たな出発を。祝福を信じてはじめて参りましょう。

祈ります。

慈愛に満ちたもう、主イエス・キリストの父なる聖なる御神様

仙川教会は、主任担任教師が病で倒れ、召天され試練の時を過ごして参りましたが、神様の隣りが豊かに注がれて、悲しみを乗り越え教師招聘が導かれました。2024年度4月より新たな歩みが始まろうとしています。僕は、遣わされて、代務者としてこの大切な癒しと準備の時を共に過ごして参りましたが、すべてが守られて、整えられて、代務の務めを終えようとしています。心から感謝致します。

仙川教会のこれからの歩みは、すべてが順調というわけにはいかないでありましょう。少子高齢の時代の波が具体的に押し寄せて来ています。宣教においても、教育という課題においても厳しい谷を通ることはあるでしょう。しかし、主は共におられますから、大丈夫とわたしたちは信じます。約60年に渡って成長をゆるされてきた教会です。必ず、主が必要を満たしてください。その信仰を固く持たせてください。聖霊による愛を増し加え、良い時も悪い時も、喜びも悲しみも分かち合って成長させてください。主よ、あなたが先立ちたもうて、この群れを導いてください。

尽きませぬ感謝と願い、尊き主イエス・キリストの御名によって、み前におささげいたします。

アーメン